

えがお 愛顔の生きもの 100年レター

愛媛県生物多様性
ニュースレター

vol. 7
(令和2年9月)

水辺の植物の危機

日本産野生維管束植物約7,000種のうち、約25%の種が日本の絶滅の恐れのある野生動植物(環境省レッドリスト2019)で絶滅危惧種に区分され、多くの種が絶滅の危機にさらされています。植物が生育する環境のうち、水辺環境は絶滅危惧種が集中する地域で、愛媛県が条例により指定した愛媛県特定希少野生動植物においても、指定された高等植物12種類のうち、約33%が湿地や水田を含む水辺環境を主な生育地としています。水辺環境は水質悪化や外来種等の人為的影響を受けやすく、かつては普通種だったものが今では絶滅危惧種となった植物も数多く存在します。

ミスキンバイ(写真1)は、湖沼やため池に生育する多年生の浮葉～抽水植物です。元々、日本での産地は限定的でしたが、近年の水域の埋立等の影響で生息地が急激に減少しています。



写真1 ミズキンバイ(アカバナ科) 環境省:絶滅危惧Ⅱ類、愛媛県:絶滅危惧ⅠA類(CR)、愛媛県特定希少野生動植物(令和元年7月19日指定)

CONTENTS

- 【図鑑】愛媛県の水田周辺で観察できるタニシの仲間と外来種のスクリンゴガイ
- 【アルバム】わくわく自然観察会
- 【愛媛の生き物紹介】思い出深い八エ～愛媛県ゆかりのケジロキアブ～
- 【特定外来生物】松山市と新居浜市でアカカミアリが確認されました

図鑑 愛媛県の水田周辺で観察できるタニシの仲間と外来種のスクリンゴガイ



愛媛県内の水田周辺で確認できるタニシの仲間(タニシ科)は、オオタニシ、マルタニシ、ヒメタニシの3種類です。この3種の県内の分布状況は現在調査中ですが、特に中予地域の平野部の水田ではマルタニシはほとんど確認されなくなりました。1980年代後半から、この3種のタニシの仲間と形状がよく似ていることから「ジャンボタニシ」と呼ばれる南米原産のスクリンゴガイが愛媛県内の水田で分布を拡大しています。(主任研究員 村上裕)

愛媛県に生息するタニシの仲間

オオタニシ

殻高60mm前後。主にため池等の水量の安定した場所に生息している大型のタニシ。雌雄異体で卵胎生です。

卵胎生(らんたいせい)とは?

鳥類や昆虫のように卵で生まれることを卵生、哺乳類のように子供で生まれることを胎生といいますが、タニシの仲間は、メス貝の体内で卵を育ててから子貝を生みます。これを卵胎生といいます。

ヒメタニシ

殻高20-30mm前後。主に用水路に生息しているタニシ。コンクリート面等の垂直部分にも群生することがありますが、水田内部では見つかりません。雌雄異体で卵胎生です。

マルタニシ

殻高40mm前後。主に水田内部に生息しているタニシ。年間を通じて極度に乾燥しない水田が必要です。雌雄異体で卵胎生です。
環境省カテゴリー：準絶滅危惧種

雌雄異体(しゆうたい)とは?

陸に住むカタツムリやナメクジの仲間の多くは雌雄の区別がありません(雌雄同体といいます)。タニシの仲間は貝殻では区別できませんが雌雄が分かれています(雌雄異体)。マルタニシでは70-80%がメスといわれています。

スクリンゴガイ(外来種)

スクリンゴガイ(ジャンボタニシ)

1986年7月に、松山市、宇和島市の一部で野生化した成貝、幼貝、卵塊を確認が確認されたのが愛媛県初記録です。外観がタニシと似ていることから通称「ジャンボタニシ」と呼ばれています。スクリンゴガイ科の貝なのでタニシの仲間ではありません。水稲の苗を食害し、繁殖力も強いことから各地で問題になっています。

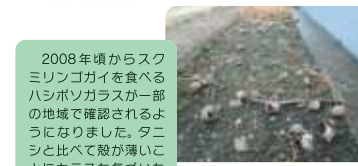


スクリンゴガイが、日本のタニシの仲間と大きく異なるのは、卵生ということ。6月以降、水田の畦畔や用水路の壁にピンク色の卵を産みます。



タニシの仲間よりも、各螺塔は彫らえます。

スクリンゴガイは肺呼吸とエラ呼吸ができますが、タニシの仲間はエラ呼吸のみです。



2008年頃からスクリンゴガイを食べるハシボンガラスが一部の地域で確認されるようになりました。タニシと比べて殻が薄いことにガラスも気づいたのかも…。

ハシボンガラスが捕食し、畦畔に残された貝殻

情報求む!「みんなで調べる愛媛の生きもの」

生物多様性センターでは「愛媛の生きもの調査隊」事業の一環でスクリンゴガイの生息状況調査を実施しています。



詳しくは、
生物多様性センターHP
「みんなで調べる愛媛の生きもの」
始めます!



マルタニシとスクリンゴガイの違い

	マルタニシ	スクリンゴガイ
繁殖方法	卵胎生 (20-40個/年)	卵 (ピンク色:数千個/年)
耐寒性	あり	弱い
原産地	日本固有亜種	南米 (日本には1980年代)
成熟日数	約180日	約60日 (30日で繁殖可能)

アルバム わくわく自然観察会



愛媛県生物多様性センターでは、年間を通じて自然観察会を開催しています。令和元年度は8回の自然観察会を実施しました（共催と講師依頼実施分除く）。

■大三島で生きものを探そう！（6月22日開催）

愛媛植物研究会の小澤潤氏を講師に、今治市大三島町口総で、水田周辺の動植物の観察会を開催しました。参加者は、水路ですくい上げたタイコウチ等の水生昆虫やメダカ、エビ類等を図鑑で調べながら同定に取り組みました。また、水田内では愛媛県特定希少野生動植物に指定されたテンジソウを観察し、大三島の自然を堪能することができました。

■生きもの探しin須ノ川公園（7月13日開催）

愛媛植物研究会の橋越清一氏を講師に、南宇和郡愛南町の須ノ川公園で汽水域の動植物の観察会を開催しました。講師の体験から、公園になる前にニホンカワウソが生息していた時の話を聞きました。また、希少種であるベンケイガニ、クロベンケイガニ、アカテガニの釣り体験や、ハクセンシオマネキの観察をしました。さらに貝類についても観察し、食べられる貝の見分け方と標本の作成方法について学びました。参加者は、愛南町の須ノ川公園の豊かな生物多様性と希少種の多さに感動していました。

※令和2年度自然観察会について

生物多様性センターでは、令和2年度も引き続き自然観察会を開催しますが、新型コロナウイルス対策の一環として一部内容を変更する予定です。開催案内は生物多様性センターHP等で公開予定です。

（主任研究員 藤林弘恭）

月日	場所	内容
5月24日	今治市・西条市	ハッチョウトンボとアキサンショウウオの観察
6月22日	大三島	水田周辺の動植物観察
7月13日	愛南町	汽水域の動植物観察
8月10日	中山川周辺	中山川の魚類や昆虫観察
8月24日	東温市	水草標本作成
10月5日	とべ動物園	虫の鳴き声観察
11月16日	今治市	身近な草木でリースづくり
12月8日	八幡浜漁港	水揚げされた海産魚解剖



写真2 自然観察会の様子

愛媛の生き物紹介

思い出深いハエ～愛媛県ゆかりのケジロキアブ～

ケジロキアブ *Xylophagus albopilosus* Miyatake, 1965 (写真3) は双翅目（ハエ、アブやカの仲間）キアブ科に属する昆虫です。このキアブの仲間には日本に4種、愛媛には3種が生息しており、いずれの種も自然度の高いブナの巨木が生えているような古い森に住みます。そのため、一般の人の目に触れる機会はあまりないといえるでしょう。ケジロキアブの成虫は愛媛では4月から6月初めに掛けて、倒木の周辺で稀に見られます。幼虫は朽ち木に住みますが、詳しい生態はわかっていません。同じキアブの仲間では、朽ち木中でほかの昆虫の幼虫を捕食するため、ケジロキアブも同様の生態を持つと考えられています。

本種は愛媛大学農学部で教鞭を取られた宮武陸夫先生が愛媛県三坂峠産の標本をもとに新種として記載した、愛媛に大変ゆかりのある昆虫です。先生はテントウムシの分類学的研究で有名な方でしたが、ハエの類もお好きでケジロキアブを含めて6種の新種記載をされています。先生にご自身が記載されたハエのお話を生前伺った時には、自分で採った標本ではなくて、人の採集品ばかりで論文を書いたものですが、と謙遜しつつも嬉しそうにお話しされていたのが大変記憶に残っています。宮武先生は昨年9月に90歳で亡くなられましたが、先生の残した数多の昆虫標本や優れた研究業績は人類の共通財産として永久に活用・保存されていくでしょう。

（研究員 黒田啓太）



写真3 ケジロキアブ *Xylophagus albopilosus* Miyatake, 1965



松山市と新居浜市でアカカミアリが確認されました。



2020年7月、松山港と新居浜市内物流ターミナルにおいて、外来生物法で特定外来生物として指定されているアカカミアリ *Solenopsis geminate* Fabricius, 1840（ヒアリと同じトフシアリ属のアリ）が、計6,000頭（新居浜市は複数の女王アリ含む）確認されました。

本種の定着を水際で防止する為に、生物多様性センターでは関係機関と連携してモニタリングを実施しています。今回、アカカミアリは松山市、新居浜市共にコンテナ集積場所やコンテナ内部といった人の往来が限定される閉鎖環境で確認されました。モニタリング調査の結果から周囲への拡散の可能性は低いといえます。

アカカミアリとは？

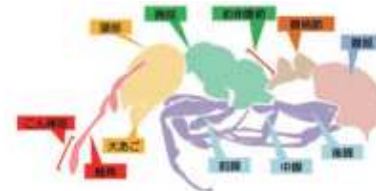
元々は北米南部から中米、南米北部が原産地ですが、世界中に分布を広げ、農業被害、環境攪乱、刺咬被害が甚大であることから、ヒアリやアルゼンチンアリと並んで世界の侵略的外来アリワースト6に搭載されています。日本では米軍物資に紛れて硫黄島等に侵入・定着し、現在では優占種となっています。2017年以降、海外からの貨物経由で本土への侵入が頻繁に報告されるようになりました。

愛媛県では2017年7月24日に四国中央市の港湾コンテナ内で400頭の働きアリと5頭の有翅女王アリが確認されたのが初記録で、翌年に新居浜港で1頭確認されています。

アカカミアリの見分け方

ヒアリやアカカミアリと、体色がよく似た在来種等のアリ類は、肉眼では判別困難ですが、普段見かけるアリとは明確に異なる外観特徴を持っています。右写真の①～④に全て該当すれば、ヒアリ・アカカミアリの可能性が高くなります。

（主任研究員 村上裕）



働きアリの外部形態



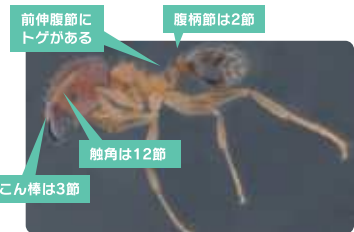
アカカミアリの特徴

（新居浜市で採集したアカカミアリ）
※ヒアリも同じ特徴を持っています

普段見かけることが多いアリ類（刺針を持たないアリ）



アミアリの仲間



オオズアリの仲間

編集・発行
愛媛県立衛生環境研究所 生物多様性センター
〒790-0003 愛媛県松山市三番町8丁目234
TEL 089-931-8757 FAX 089-934-6466
URL : <https://www.pref.ehime.jp/h25115/biodiversity>
Mail : seibutsu-cnt@pref.ehime.jp

編集後記 生物多様性センターでは、これまでに刊行したニュースレターや、研究成果をHPで公開する予定です。ぜひご利用ください。